

「御国の福音」とブライダル・パラダイム

ベレーシート

●今回のセミナーの最後のセッションとなりました。「セッション 5」のタイトルは、「御国の福音」とブライダル・パラダイムです。「ブライダル・パラダイム」(Bridal Paradigm)ということば自体、耳慣れないことばだと思えます。私がこのことばをあえて使っているのは、キリストと教会とのかかわりを「花婿と花嫁」という視点で見ることが、今日の教会において希薄化しているからです。聖書は、キリストと教会の関係をいろいろな比喻で表現しています。たとえば、人間の「かしらとからだ」、ぶどうの木の「幹と枝」、羊の群れの「羊飼いと羊」、建物の「礎石と石」、結婚における「夫と妻」「花婿と花嫁」というように・・・です。その中でも、「花婿と花嫁」の比喻は、神のご計画全体を常に意識しながら歩むという、きわめて夢のある終末的・未来志向をもった比喻と言えます。婚約はすでに成立しているのですが、いまだ結婚していない状態です。花嫁は花婿が迎えに来るのを待つという「待ちの状態」に置かれていますが、将来、必ず花婿が花嫁を迎えに来て結婚することが決まっているのです。キリストの花嫁が「すでに」と「いまだ」の緊張関係に置かれていることを正しく理解し、信じて花婿を自覚的に待ち望むということの重要性と、キリストの花嫁が神のご計画の中核にあるという視点の重要性を「ブライダル・パラダイム」ということばで表しています。

●「キリストの花嫁」という「ブライダル・パラダイム」は、神のご計画の全体像と「御国の福音」、「永遠の都エルサレム」の理解とも深くつながっています。したがって、神のご計画の究極的な完成を描くことがなければ、「キリストの花嫁」ということばは容易に使うことができないのです。特に男性の場合、自分が「キリストの花嫁」であるというイメージが理解しにくいということがあるかもしれません。教会はしばしば「キリストのからだ」として理解されることが多いのですが、ひとたび、「キリストの花嫁」という概念が正しく理解されるならば、「花婿」に対するこれまでにない新鮮なかかわりをもたらすことになるのです。「ブライダル・パラダイム」に秘められた啓示は、神とのかかわりにおいて、「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして主なる神(あるいは花婿)を愛する」という神の第一戒を回復させる力となるばかりか、今日のキリスト教会を覆っている閉塞感を打ち破り、新たな変革をもたらす源泉となるに違いありません。

1. 教会がキリストの花嫁となることは神の永遠のご計画

●教会がキリストの花嫁とされたのは神の永遠のご計画によるものであることをお話ししたいと思います。使徒パウロは、コリント人への手紙第二、11章2節で、「私はあなたがたを、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにした」と述べています。ここで使徒パウロはコリントの教会の人々に、「私はキリストの福音を伝えてあなたがたをキリスト教に改宗させようとした」とは述べていませ

セッション 5

ん。「あなたがたを清純な処女(単数)として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにした。」と述べているのです。なぜなら、これが神の永遠のご計画において重要な事柄だからです。つまり、あなたがた(教会)がひとりの人(キリスト)の花嫁であるようにされたのは、この世界の基の置かれる前から神(御父)が、御子のために、すでにご計画していたことなのだということです。これはパウロが考えたことではなく、神がご自身の子である方(イエシュア)に花嫁を与えるというご計画が、すでにあったということなのです。

●創世記 2 章に記されているように、神である主はエデンの園に主の形造った人を置かれました。「エデン」(「エーデン」 אֵדֶן)とは、とても贅沢な良い食べ物があり余るほど豊富にあって、しかもそれを思いのまま食べてよいところです。また、いのちの水の源泉である川が四方に流れているところで、それは天にある神の御座から流れてくるいのちの川です。そこには永遠の喜びと楽しみがあるところ、それが「エデンの園」という意味です。そこに「人」が置かれたのです。「人」は神が造られた被造物(野の獣や空の鳥)のすべてに名をつけるという立場にいました。「名をつける」ということは、それらを支配する力が与えられていたということです。ところが、何か大切なものが欠如していました。それはその「人」がひとりであったということです。この「人」(「アードーム」 אָדָם)に対して神はこう言われました。「人が、ひとりであるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう」と。そして彼に深い眠りを与え、その眠っている間に、彼のあばら骨で一人の女を造り上げたのでした。この出来事は実は天のご計画の写しなのです。男と女(妻)が結び合っただけで一体となるという奥義はそもそも、天にある神のご計画に秘められた出来事だったのでした。「『それゆえ、人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる。』この奥義は偉大です。」とパウロも言っています(エペソ 5:31~32)。

●私は最近になるまで、私は教会が「キリストの花嫁」であるという明確な意識をもっていませんでした。もちろん、教会が「キリストの花嫁」という比喻で表されることを知識として知ってはいましたが、常にそのことが念頭に置かれることはなかったのです。しかし「御国の福音」を考えると、「キリストの花嫁」という概念は、きわめて重要な概念であり、「終わりの日」に向かっているこれからの時代に必要なパラダイム(=視点、考え方、捉え方)だということを神の導きの中で確信したのです。

●「この奥義は偉大です」とパウロが述べたのは、結婚の奥義が神のご計画と深くかかわっているからです。そもそも、御父は御子に永遠の愛を共にする結婚のパートナーを与えるために、御子を人としてこの世に遣わされました。つまり、この世での御子イエシュアの十字架の死による血の注ぎは、私たちに対する「驚くべき求愛行為」でした。御子イエシュアの十字架の上で流された血潮(血の杯)を受け取った者はみな、花婿としてのイエシュアの求愛行為を自覚的に受け入れた花嫁なのです。教会で行われている聖餐(式)の重要性は、すでに自分たちがイエシュアと婚約した者であることを思い起こすだけでなく、やがて迎えに来られる花婿に対する愛を再度確認するということです。そして同時に、ますます花婿を慕い求める花嫁となるために、決意を新たにす聖餐の時としなければならないのです。換言するなら、聖餐とは、主にある者が聖霊によって終末論的希望に対する信仰を刷新するものでなければならないのです。

セッション 5

●上記のことを理解するためには、ユダヤの婚礼に対する知識が不可欠です。イエシュアと弟子たちの「最後の晩餐」で語られたイエシュアのことばと、そしてその食事の席で最後に差し出された「杯」(ぶどう酒)は、イエシュアと弟子たちとが婚約するためのものであったのです。最後の晩餐の最後に語ったイエシュアのことばは、今日のキリスト教会が聖礼典として大切にしている「聖餐式」制定の根拠となっている箇所です。イエシュアの言われる「新しい契約」とは、結婚を前提とする「婚約式」がなされたとは私は解釈します。「婚約式」をしたのであれば、教会が「キリストの花嫁」と呼ばれるのは当然です。

●しかしこれまで、教会で執行される聖餐式の中にこの概念が欠落していたように私は思うのです。その大きな理由は、ユダヤの婚礼のしきたりを知らずにいたことです。教会は、キリスト教の歴史のある時点から聖書のルーツであるユダヤ的視点を断ち切ってしまう、ボタンのかけ間違いが起きました。しかし昨今、聖書はユダヤ的視点をもって読まなければ正しい理解ができないという提言によって、いろいろなところで関心をもたれるようになってきています。実は私も今、その視点から聖書を読み直している一人なのです。

●さて、ユダヤの婚礼のしきたりという視点からこの「最後の晩餐」を考える時、聖餐式にあずかる者のイメージは一新されるはずですが、なぜ、イエシュアが「この過越の食事をすることをどんなに望んでいたのか。」と言ったのが、良く理解できるはずですが、これまで覆っていた雲が払拭されて、これまで以上に、イエシュアが語ろうとしていたこと、御国の福音、そして神の御計画(マスタープラン)が明確にされるだけでなく、聖餐にあずかるたびに、主にある者たちは、自分たちが「キリストの花嫁」であることをはっきりと自覚するようになると思います。そしてその自覚によって、将来に起こる神のご計画に対して、ますますはっきりと目が開かれていくことになると思います。

(1) ユダヤの婚礼のしきたりにおける三段階

●ユダヤの婚礼のしきたりには三つの段階があります。その一つは「許嫁(いいなずけ)の段階」、二つ目は「婚約の段階」、そして三つ目は「結婚式」(婚姻)とそれに続く「宴会」(婚宴)の段階です。

① 許嫁(いいなずけ)の段階

●「許嫁」とは、幼少時に本人たちの意志にかかわらず、双方の親または親代わりの者が合意で結婚の約束をすること。ユダヤの場合、結婚を当人以外の者が決定するということが普通で、聖書の中にもそのことが記されています。たとえば、アブラハムの息子であるイサクの場合、彼の妻をアブラハムの親戚の中から選ぶようにと、アブラハムの家の最年長のしもべであったエリエゼルが、アブラハムの生まれ故郷へと遣わされます。そして見つけたのが、アブラハムの兄弟ナホルの妻ミルカの子ベトエルの娘のリベカでした。イサクとリベカは許嫁ではありませんでしたが、父親が息子の嫁を見つけるという風習が古くからあったということを示しています。同様に、御父が御子をこの世に遣わされたのは、神ご自身の息子に妻を与えるためであると云えるのです。

●ちなみに、イサクとリベカの間にも生まれた双子の兄弟エサウとヤコブの場合は、親ではなく、それぞれ自

セッション 5

分で自分の妻を探したことで苦労しています。特に、兄のエサウはカナン人の女を妻として娶ったために、母リベカを苦しめました(創世記 27:46)。

●結婚の約束が取り付けられるかどうか、まずは女性の意志を確認するための宴会を開きます。「祝宴」と訳されたヘブル語は「ミシュツテ」(מִשְׁצֻטָּה)で、「祝宴、宴会、晩餐、豪華な食事会、ふるまい」とも訳され、このための費用のすべては男性の父親が出すのがしきたりでした。アブラハムもイサクの嫁を探すのに必要な費用(贈り物も含めて)を、しもベエリエゼルに託しています(創世記 24:10, 22, 30, 53)。

② 婚約の段階

●さて、その祝宴は一週間を費やし、その最後に男性が差し出す「ぶどう酒」の杯を女性が受けて飲んだならば、婚約成立ということになるのです。このことをよく示しているのが、ヨハネの福音書 2 章に記されている「カナの婚礼」の話です。私たちの日本の文化でその箇所を読むと、「婚礼」とあるので、すでに二人は結婚し、その婚宴が開かれているのだと思ってしまいます。それが固定観念、つまり理解の型紙です。ですから聖書がなかなか見えてこないのです。この「カナの婚礼」は実は婚約成立か否かを決定する、そのための宴会がなされているのです。カナの婚礼では最後に良いぶどう酒が出てきます。果たして、女性はその良いぶどう酒を飲んだのかどうか、その結果についてはこの箇所では記されていません。しかも、その「良いぶどう酒」がどのようなぶどう酒なのか、それはただ「良い」としか記されていません。実は、宴会の最後に出されるぶどう酒が、やがて花婿なるイエシュアが花嫁のためにご自身の肉を裂いて流される血であることはまだ隠されているのです。

●つまり、「カナの婚礼」がすでに結婚した後の披露宴をしているわけではないということです。宴会の最後に、花婿候補が結婚を申し込むための重要なぶどう酒がなくなったことの話がなされているのです。良いぶどう酒が差し出され、それを花嫁候補が受け取ったとき、はじめて両者互いに花婿と花嫁としての縁を結ぶことになるのです。つまり、婚約成立です。同様に、時が来て、イエシュアが最後に差し出されるぶどう酒(=十字架の血潮)を私たちが受け取るならば、やがてイエシュアと結婚しますという意志を表明したことになり、「キリストの花嫁」となるのです。

●ユダヤの婚礼では、一旦婚約が確定すると男性は実家に戻り、結婚に備え始めます。伝統的には、一年後に式が持たれることになっていました。畑を備え、耕し、作物が植えられ、父の家に妻を受け入れる準備として部屋が造られます。彼が花嫁を迎えるために、万全の配慮と取り組みがなされ、すべてのことに細心の注意が払われますが、父親がゴー・サインを出さない限り、花婿は花嫁を迎えに行くことは許されないので、ですから、結婚の日がいつかということは、花婿にも分からないというわけです。

●さて、こうした背景から最後の晩餐を見てみましょう。ユダヤのしきりでは一週間に渡る宴会で、花嫁候補とされた女性は花婿のすることをじっくりと観察するのです。この一週間の宴会が示唆しているのが、イエシュアの公生涯です。花嫁候補としてのイエシュアの弟子たちは、この間、花婿となるイエシュアのふるまいを見てきたのです。そしてその宴会の最終日に男性の差し出すぶどう酒を女性が受け取って飲むなら

ば婚約成立でした。おそらく、女性の前にぶどう酒を置いた男性は、相手がぶどう酒を飲むかどうかの瞬間、ドキドキ・ハラハラだったと思います。もし、飲んでもらえなければ、それまでの宴会とその費用はすべて無意味ということにもなってしまいます。最も期待が高まる時、それがイエシュアの言う「わたしは、苦しみを受ける前に、あなたがたといっしょに、この過越の食事をすることをどんなに望んでいたことか。」なのです。まさに、受験生が入試の合格発表に臨むような心持ちであったことでしょう。イエシュアが最後の晩餐で差し出したぶどう酒の杯を、弟子たちは受け取って飲んだのです。婚約成立です。ところがその花嫁候補がすぐにも花婿を裏切ってしまうのですが、花婿の差し出したぶどう酒の杯が「良い」のは、花嫁の罪を赦すだけでなく、きよめる愛と力をもったぶどう酒であったということなのです。

●弟子たちはイエシュアが差し出すぶどう酒を飲んで、花婿と花嫁という新しい契約を結びました(しかし、まだ正式な結婚をしてはいません)。ユダヤの婚礼のしきたりでは、婚約時に二人は杯を交わしますが、花婿となる者はその杯を飲みません。飲むのは花嫁だけです。なぜなら、花婿は結婚するまでの間(おそらく1年間)は、花嫁のために自らの身をきよめるために、また酒の席で放蕩に走って誘惑を受けないようにするために、杯を口にしないようです。それを口にできるのは結婚式を挙げてからです。イエシュアとその弟子たちとの「最後の晩餐」が「婚約式」であったとするならば、イエシュアが言われたことば「これを取って、互いに分けて飲みなさい。あなたがたに言いますが、今から、神の国が来る時まで、わたしはもはや、ぶどうの実で造った物を飲むことはありません。」という意味が容易に理解できるのです。つまりここでの「神の国が来る時」とは「結婚の時」であり、花婿なるイエシュアが空中再臨によって花嫁なる教会を迎えに来られる時(=携挙の時)なのです。

●イエシュアが最後の晩餐で、「あなたがたはわたしを捜すでしょう」と言ったとき、ペテロとの問答が始まります。そしてイエシュアは「あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです」と言われました(ヨハネ 14:2~3)。イエシュアが天に戻られたのは、新居を備えるためです。おそらくペテロはこのことを理解できなかったと思われます。花嫁を迎える前に、イエシュアが十字架の死によって花嫁の罪の贖い、罪のきよめをなされ、花嫁を花嫁としてふさわしく整えるようにされたのも、実はその準備の一環だったのです。

③ 結婚の段階

●ユダヤでは、花婿が花嫁を迎えに来た時に、フッパー(חֲפָצִים)という天蓋の下で結婚式(婚姻)を行ないます。その後、二人は花婿が準備した新居で七日間のハネムーン(二人だけの親密なとき)を過ごします。結婚の祝宴(婚宴)はハネムーンの期間が終わってから開かれます。

●最後の晩餐の時に、イエシュアは「過越が神の国において成就するまでは、わたしはもはや二度と過越の食事をすることはありません」と言われました。それはどういう意味でしょうか。花嫁との七日間のハネムーン(つまり教会の携挙後の七年間)が終わると同時に、イエシュアが花嫁(御使いも含む)を連れて地上再臨され、「小羊の婚宴」が開かれます(黙示録 19:9)。このとき、地上で大患難を経て悔い改めた神の民イスラ

セッション 5

エルとともに「小羊の婚宴」に招かれます。彼らもまた本来の神の妻としての立場を回復され、婚宴においてともに喜ぶのです。「過越が神の国において成就する」とは、イスラエルの民を大患難から救い出すために、反キリストに対して神のさばきがなされることを意味しています。ですからその時まで、イスラエルの民(民族的、あるいは「残りの者」)は、メシアであるイエシュアとの婚宴の食卓を囲むことは出来ないということの意味しているのです。婚姻と婚宴の違いを心に明記しましょう。

●ところで、今日教会で行われている、キリストのからだと血とにあずかる「聖餐式」は、以下のように大きく三つの意義があると理解されています。

- a. 私たちを救うために死なれたキリストを覚えること(過去)
- b. キリストを信じる教会の一員であることを確認すること(現在)
- c. 神の国の完成時の喜びの祝いを展望すること(将来)

特に、聖餐式の中で最も認識が弱い部分は、c. の「将来の展望」です。なぜなら、キリスト者にとって、自分は「キリストの花嫁」として花婿なるイエシュアと婚約した者であるという認識が希薄だからです。「終わりの時」が近づいていることを覚えるならば、聖餐の式にあずかるたびに、この「キリストの花嫁」としての自覚がますます強められる必要があると信じます。

(2) 教会の今日的課題は「ブライダル・パラダイム」への転換

●「ブライダル・パラダイム」における**花嫁の霊性**は、奉仕とか働きとかいうよりも、神を知ること、神を愛することを喜びとし、そのことを何よりも大切にすることです。つまり、「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして主なる神を愛する」という第一戒に生きる世界です。それは主のために仕えることを第一義とするマルタではなく、主の前にすわって主の語られることばを聞くという**マリヤの霊性**です。あるいは、「私は一つのことを主に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、主の家に住むことを。主の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。」と歌った**ダビデの霊性**です。さらには、**祭司の霊性**ともかかわりがあります。

●特に、祭司の霊性について説明しておきたいと思います。なぜなら、この霊性について教会で語られることが少ないのではと思うからです。祭司の第一義的な務めは、神と顔と顔を合わせて主を知り、主と親しく交わることです。エデンの園におけるアダムの務めは、「地を耕し、そこを守る」ことでした(創世記 2:15)。神のかたちとして造られた人間の務めは、後に「王である祭司」「祭司の王国」というフレーズで表わされるように、「地を支配すること」と「地を耕すこと」です。王として地を支配する力は、祭司として地を耕すという務めを疎かにするときに喪失します。それはダビデの治世とソロモンの治世を見るとよく理解することができます。ダビデは完全な人間ではありませんでしたが、王である前に祭司としての務めを最も重要視した人物です。詩篇 27 篇 4 節の「私は一つのことを主に願った」ということばにそのことがよく表わさ

セッション 5

れています。ところが、ソロモンは王として治める力を求め、それを与えられたにもかかわらず、父ダビデのような「主を求める」祭司としての務めにおいては脆弱でした。王としての賜物は与えられていましたが、ダビデのような「主を尋ね求める」霊性が希薄でした。そのことを父ダビデは見抜いていたのかどうかわかりませんが、後継者となる息子のソロモンへの遺言として、次のように語っていたのです。

【新改訳改訂第3版】 I 歴代誌 28 章 9 節

わが子ソロモンよ。今あなたはあなたの父の神を知りなさい。全き心と喜ばしい心持ちをもって神に仕えなさい。

【主】はすべての心を探り、すべての思いの向かうところを読み取られるからである。もし、あなたが神を求めるなら、神はあなたにご自分を現される。もし、あなたが神を離れるなら、神はあなたをとこしえまでも退けられる。

●父ダビデは子ソロモンに、①「神を知ること」(「ヤーダ」**יָדָה**)、②「神に仕えること」(「アーヴァド」**אָוָד**)、③「神を求めること」(「ダーラシュ」**דָּרַשׁ**)を命じています。これら三つはすべて祭司的務めです。ダビデは王としての務めの前にこれらの祭司的務めが大切であることを、ソロモンに遺言として語ったのでした。しかしソロモンはこの父ダビデの言葉を重く受け止めることなく、政治的取引(政略結婚等)によって平和を保持しようとしたことから、やがてイスラエルの国は二つに裂かれ、さらには亡国という憂き目を見ることになりました。

●「王であり、かつ、祭司としての務め」を果たした最初の人はずっとアダムですが、モーセもその一人です。彼は神の民の指導者である前に祭司でした。「【主】は、人が自分の友と語るように、顔と顔を合わせてモーセに語られた。」(出エジプト 33:11)とあります。彼は 40 日間も主の山で過ごした人です。そして神の教え(トーラー)が彼を通して与えられたのです。それゆえモーセには、神の権威と神の力が賦与されていました。神の民イスラエルが主を礼拝するために「幕屋」が建造されましたが、そこで「祭司としての務め」を任じられたのはレビ族です。ヤコブの子どもたちの中で「レビ」は三番目の子です。「レビ」という名は、母レアが「今度こそ、夫は私に結びつくだろう。」と言ってつけた名前です。ネーム・セオロジー(名前の神学)の視点から見ると、「レビ」(「レーヴィー」**לֵוִי**)という名前には、「神と結びつく」「神と一体となる」という意味が隠されています。祭司たちはこのレビの系譜にある者たちであり、実はモーセもその系譜の中にいた人です。レビ族はこの務めのために他の部族とは異なる務めがゆだねられていました。それゆえに、彼らには目に見える土地という嗣業は与えられず、むしろ彼らの嗣業は神ご自身でした。そこには神とのかわりにおいてきわめて重要な永遠の務めとしての「型」が見られます。

●教会は「祭司としての務め」を回復することによって、はじめて「王としての務め」を完成させることができるのです。その逆ではありません。ダビデを見ると分かるように、神のみこころにかなった「祭司の務め」があるところに、神の代理人として「治める」という「王としての務め」が成り立つからです。「王の務め」の特権は単に人(民)を支配するということではなく、神の秘密(奥義)を知り、それによって、神の支配を完成させる務めなのです。「祭司の王国」「王である祭司」という表現は、祭司の霊性と密接な関係があるのです。

●「ダビデの霊性」も、「マリヤの霊性」も、「祭司の霊性」も、そして「花嫁の霊性」も、実はみなひとつにつながっています。これらは本来、聖書の中に啓示されていたものです。それらをより強く意識するために、教会の今日的課題を「ブライダル・パラダイムへの転換」ということばで表わしたいと思います。「キリストのからだなる教会」の概念も、この「花嫁なる教会」の概念の中にくられてしまうからです。

2. 花嫁の霊性の特徴

(1) 花婿をひたすら慕い求める花嫁

●花嫁の霊性の特徴は、花婿をひたすら慕い求め、愛することを何よりも大切にすることです。しかもその目標とするところは、「顔と顔を合わせ」(Face to face / 「パーニーム・エル・パーニーム」 פְּנֵי אֵלֹהִים לְפָנָיו)で、花婿とともに過ごすことです。この向き合いの源泉は御父と御子にあります。ヨハネは福音書の冒頭で「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった」と記していますが、「ことばは神とともにあった」という「ともに」には、ギリシア語で「プロス」(προς)という前置詞が用いられています。その前置詞が意味することは、2本のマイクが横に並んで立っているというような「ともに」ではなく、「向き合った形でともにいる」ということです。御父と御子とは永遠に顔と顔とが向き合っている存在なのです。その御父と御子とのかかわりは、人間の創造においても現わされることとなります。

●神が最初の人アダムを造られたとき、その鼻にご自身のいのちの息を吹き込まれました。そのときにも顔と顔とが向き合っています。そのかかわりの中で人が神のかたちに似せて造られたのですから、神と人との本来の姿が、「顔と顔を合わせた」かかわりであったというのは至極当然のことです。そしてその後、「人がひとりであるのは良くない」と、神である主は人を眠らせ、その人のあばら骨を取って、彼に「ふさわしい助け手」(「エーゼル・ケネグドー」 עֵזֶר כְּנֶגְדֹי)を造られました。眠りから覚めた人は「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女(「イッシャー」 אִשָּׁה)と名づけよう。これは男(「イーシュ」 אִישׁ)から取られたのだから」と言って、喜びと感動を表わしました(創世記 2:23)。「それゆえ男は・・妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。」(同、2:24)とあります。使徒パウロはこの「アダムとエバのかかわり」を、「キリストと教会」(花婿と花嫁)のかかわりの型だと解釈し(エペソ 5:31~32)、これを「奥義」だと言っています。つまり、天と地、御父と御子、神と人、花婿なるキリストと花嫁なる教会のかかわりを一つにすることは、神のご計画(ヴィジョン)における「奥義」なのです。

●人が罪を犯したあとに、「人とその妻は、神である主の御顔を避けて園の木の間に身を隠した」(創世記 3:8)とありますが、「主の御顔を避ける」という表現は、神と人との本来あるべきかかわりが壊れたことを意味します。ですから、神の救いの究極は神と人とが「顔と顔を合わせる」ことにあることは言うまでもありません。ヨハネの黙示録ではその救いの究極を「**神の御顔を仰ぎ見る**」(22:4)と表現しています。キリストの花嫁の究極の喜びは、花婿といつの日か「顔と顔を合わせて見る」ということです。では、現在は「顔と顔を合わせて見る」ことはできないのでしょうか。いいえ、完全ではなくても、「ぼんやり」と見

セッション 5

ることはできるのです。「一部分」を知ることができるのです。とすれば、ぼんやりではあっても、花婿の顔を慕い求めようとするのは自然です。主の隠された秘密の一部ではあっても、それを求めることは自然であり、花嫁に与えられている喜びなのです。その喜びを日々豊かに経験することで、花婿を待ち望む思いはより増してくるのです。これが花嫁の霊性です。

●キリストの花嫁は、花婿の前に「傷なき者として立つ」のでなければなりません。なぜなら、エバがアダムから造られたように、花嫁は花婿から造られた者だからです。花嫁は花婿のきよさと美しさの反映でなければならないのです。これが「一体である」ことの奥義と言えます。その視点からキリストの贖罪を考える必要があります。もともと汚れに満ちた花嫁を、贖罪によってきよめてふさわしい花嫁にするというのではなく、神のご計画によれば、この世の基の置かれる前からキリストの花嫁はすでにキリストにあって選ばれ、傷のない美しい花嫁として造られたがゆえに、花嫁の贖いが必要とされたのです。そこに花嫁に対する花婿の犠牲的な愛があるのです。

(2) キリストの花嫁の品性としての「きよさ」

●教会はキリストの花嫁として婚約したのです。興味深いことに、ユダヤの文化では、婚約と結婚ということとはほぼ同じ意味で使われています。同じ意味とはどういうことかと言えば、婚約した場合、その二人の関係は夫婦と同じ倫理が要求されるということです。教会は、神のひとり息子の妻となるべく、永遠の昔から神のみこころの中に定められていました。それゆえ、そうしたご計画に基づいて、使徒パウロは「**私はあなたを、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです。**」(Ⅱコリント 11:2)と述べているのです。ですから、私たちは、キリストの花嫁として結婚するという意識を明確にもった教会形成が重要です。それは同時に、神のご計画全体(神のマスタープラン)を意識することにもつながるのです。

●さて、Ⅱコリント 11 章 2~3 節には、キリストの花嫁の品格—「清純なおとめ」について語られています。まず、使われている語彙の意味について把握しておきたいと思います。「清純な」(きよい、純潔な、純真な、潔白な、貞潔な)と訳されるギリシア語は「ハグノス」(ἀγνός)で、新約で 8 回使われています。その中のひとつが下記のみことばです。

【新改訳改訂第 3 版】Ⅰヨハネ 3 章 2~3 節

2 愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。

しかし、キリストが現れたなら(=再臨されたなら)、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。

なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。

3 キリストに対するこの望みをいだく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。

●3 節の「この望み」とは、2 節にある「キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となる」、「キリストのありのままの姿を見る」という望みです。これを別のことばで言うならば、「一体となる」という

セッション 5

ことです。この「望み」をいただく者はみな、花婿なるキリストにふさわしく「自分を清く」しなければなりません。教会は、愛といのちのあかしであるキリストの血潮によって、すでに「きよい」者とされています。それゆえ、その恩寵にふさわしく生きることが求められているのです。なぜなら、この課題は私たち(花嫁)に与えられている究極の望みから来る必然的な要求だからです。もし「自分を清く」しないなら、花婿なるキリストと結ばれて一つになることを心から願っていない花嫁であることを、自ら証明しているようなものです。

●「自分を清くする」とはどういうことでしょうか。使徒パウロの表現によれば、「思いが汚されない」(Ⅱコリント 11:3)ことです。思いが汚されないためには、花婿の語ったことばを自分の思いとすることですが、花婿の語ったことばだけを自分の思いとすることは決して容易ではありません。ですから、使徒パウロは「蛇が悪巧みによってエバを欺いたように、万一にもあなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真実と貞潔を失うことがあっては」と心配しています。「花嫁」は「純真なおとめ」として、婚約中の身であることを意識し続ける必要があるのです。ジャック・ヘイフォードという牧師の『地震』という著書があります。その中で彼は、黙示録 2~3 章にある七つの教会に対する使信を、「教会のいのちを奪う 4 つの要素」としてまとめて指摘しています。それを紹介しながら、多少、付け加えて説明したいと思います。

① 活動や働きが教会の優先順位の第一になること

●教会のいのちを奪う要素の一つは、活動や働きが教会の優先順位の第一になることです。エペソの教会は、よく働き、仕え、主に対して忠実でした。そして長い間、よく忍耐してきたと主からほめられています。ところが「しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。」と非難されているのです。教会はいつの時代でも、この種の危険性を抱えています。この世においては何らかの目に見える結果を出し、何らかの業績を残すことが常に求められます。成果主義とも言えます。しかし目に見える偉大な業績を成し遂げて成功したとしても、その後には必ず停滞し、やがて崩壊してしまうケースが多くあるのです。教会も同様です。どのようにして建て直すことができるでしょうか。「初めの愛から離れる」こととなる原因のひとつとして、活動や働きが教会の優先順位の第一になっているとすれば、悔い改めて、花婿イエシュアとの親しい交わりに戻らなければなりません。イエシュアとの親しい交わりが失われて、御父の心を見失うとすれば、教会の力の源泉を放棄したことと同様です。イエシュアは「わたしを離れては、あなたがたは何もすることができない」(ヨハネ 15:5)と言われました。私たちのいのちの源泉はイエシュアにあります。忙しいことは必ずしも良いとは言えません。エペソの教会がそうであったように、活動主義に陥ってはならないのです。忙しく活動し続けることが第一優先事項となってはならないのです。

② 不純を許容すること

●バラムとイゼベルの教えに関連する「サタン深いところ」(黙示録 2:24)とは、どちらもより過剰な刺激を与えることです。現代はまさに「高度刺激社会」です。ゲームはますますリアルになり、その刺激性は増大しています。刺激性の強いゲームをすると、コカインや麻薬を投与したときと同じような現象が脳内に

起きて、快感が得られるのだそうです。快感を伴う刺激が与えられると、それがまた欲しくなり、次第に同程度の刺激では満足できなくなり、さらにより刺激の強いものを求めるようになります。ゲーム依存症、パソコン依存症、パチンコ依存症、セックス依存症、薬物依存症はみな同じからくりです。そうした依存症の人たちが加速的に増えつつある社会、これが「高度刺激社会」です。こうした刺激を求めることを許容することによって、心と思いが汚され、悪霊たちの影響下に自分をさらすことにもなります。それによって、神のみこころに従うことが阻害されてしまいます。

●それとは反対に、神のみことばを学ぶことは一見、退屈極まりないものと思われがちです。しかし私たちがキリストの花嫁として、やがて花婿との永遠のかかわりを築くためにじっくりと聖書を読むことは不可欠です。確かに聖書は超退屈な部分が多々あります。しかし時間をかけてじっくりと読み解いていくとき、それまで見えなかった神の豊かな世界(鉱脈)を見つけることができると信じます。地道な取り組みの先に、私たちの霊を喜ばす感動があるということを経験していく花嫁でなければなりません。今日、みことばの飢饉が襲い、みことばに飢え渴く者たちが、少しずつですが起こって来ているように思います。

③ 金銭的な祝福が神の祝福だとする誤信

●「繁栄神学」では金銭的成功と祝福を同じものと考えています。そのような「繁栄神学」は、次第に教会から真のいのちを奪い取っていく考え方です。黙示録3章17節には次のように記されています。「あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、衰れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。」と。物質的な祝福が神の祝福であるというのは、全くの間違いいというわけではありません。しかし金銭的成功が神の祝福であるという惑わしを花婿は警告しています。花婿イエシュアよりも祝福にウエイトが置かれている信仰は、気をつけなければなりません。これはご利益的信仰と何ら変わりません。むしろ、常に、無尽蔵な神ご自身の豊かさを求め続ける「心の貧しい花嫁」とならなければならないのです。

④ 恵みと栄光を取り除く宗教的な組織

●イエシュアが非難された教会の問題点の第四は、主の恵みと栄光を取り除く宗教的組織にあります。ニコライ派について二度も言及されています(2:6, 15)。また、「サタンの会衆」ということばもあります(2:9)。これらは、今日に言う、マインドコントロールされたカルト集団です。もともとニコライという語彙は、ニカオスとラオスという二つの語彙から成り、講壇に立つ教職に就いた人々が他の会衆と自分たちを区別するための階級制度を示すことばでした。指導者だけが重要で、他は指導者に従うだけの存在とみなす考え方です。このようにニコライ派の人々は会衆の思いを支配し、自由にあやつろうとします。真の牧師、および教会の霊的指導者の働きはそのようであってはなりません。イエシュアのいのちが人々を通して流れるように導くことです。そして花嫁たちの行くべきところに最大限の関心がもてるように助けることです。

ベアハリート

●やがて婚姻する時には、花嫁は「光り輝く、きよい麻布の衣を着ることを許され」ます(黙示録 19:8 前半)。婚姻の時に着るきよい「麻布とは、聖徒たち(=花嫁)の正しい行いである」(黙示録 19:8 後半)と記されていることに注意を払わなければなりません。「花嫁の正しい行い」とは、①～④で説明したことが排斥されることです。

●さらに花嫁は、「蛇が悪巧みによってエバを欺いたように、万一にもあなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真実と貞潔を失うことがあってはと、私は心配しています。」という使徒パウロの心配について、十分に理解する花嫁とならなければなりません。「純潔」「真実」「貞潔」は婚約中である花嫁に求められている美しい品性であり、花婿から求められる品格です。しかし「愛のおのずから起るときまでは、ことさらに呼び起すことも、さますこともしないように。」(雅歌 2:7、口語訳)とあるように、花嫁のきよさと愛は自発的なものでなければその価値はありません。花嫁が聖霊の助けによって、ますます花婿の愛に目覚めることができるようにと祈るばかりです。なぜなら花嫁は、花婿をひたすら切望することによって、花婿が支配する御国をともに完成させ、成就させる「ふさわしい助け手」としての一体的存在だからです。

●これからの時代、花嫁なる教会が使徒パウロが余すところなく宣べ伝えた「御国の福音」に目覚めることは、花婿なるキリストを一途に慕い求めていくためのパラダイム・シフト(視点の転換)をもたらすと信じます。

御霊も花嫁も言う。「来てください。」(黙示録 22:17)

「しかり。わたしはすぐに来る。」(同 22:20)